

パブリックにおけるサードプレイスの創出
ー下北沢のイドバタとイドコロー

21918023 小林 明日美
指導教員 宮 晶子 教授

居場所 街路 サードプレイス
自己 他者 都市

1 制作の背景と目的

家以外の「居場所」はその人を社会と結びつける必要不可欠のものである。例えばいつも通う大学や仕事場、最寄りの駅や行きつけの喫茶店などとの繋がりが。それは都市の中での人々の「居場所」といえる。

しかしコロナ禍の外出自粛期間においてそのような空間との繋がりが絶たれてしまった。住宅という物理的にも精神的にも閉鎖的な居場所と、大学の授業やリモートワークといったオンライン上の居場所を往復する日々が始まった。人々は閉塞感と孤独感を解消するために家の周りを散歩して近所の公園に足を運び始めた。そこで、今までは住宅と仕事場の通過道でしかなかった街路や公園に価値を見出すことになる。家庭でも仕事場でもない第3の居場所をパブリックに求め始めた。遠出ができないという縛りが、それまでは日常の風景の一部であったまちなかに目を向けるきっかけとなったのだ。コロナを経て人々は身近な「居場所」が人生の豊かさに影響を与えると気が付いた。それに伴いパブリック空間での居場所の重要性が高まった。

家でも大学でもない、自分で選び取って足を運ぶ場所が必要だ。そこに身を置いた時に、自分はここにいると実感できる場所を求めている。そこに立った時に都市の冷たさではなく、居たいと思えるまちを望んでいる。そこで本制作では「自分の居場所はここにもあった」と感じられる建築空間を提案する。

2 サードプレイス

レイ・オルデンバーグ著『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い空間」』(*1)では「人は3本の支えがあることで精神的安定を得る生活を送ることが出来る。家庭と仕事の2本の支えだけではその2つに向ける精神的依存の比重が大きくなり、どちらか片方がぐらつくと倒れてしまう不安定な生活になる。」と述べられている。現代社会において通勤時間が長く過酷な労働環境にある都市生活者、家族と離れて暮らす人、自宅と職場にしか人間関係がない人は大勢いる。このような人々にとって、サードプレイスは特に重要であると考えられる。

仕事帰りの社会人や地元の人が集まり交流をする場として居酒屋は良い例だ。しかしコロナ禍で店舗の営業が困難になったことで商業のサードプレイスを失った。他のコミュニケーションの場を求めた人々は公園にサードプレイスを見出した。散歩の恩恵は運動による健康面だけではない。家族以外の他者を認識するという行為がもたらす、自分がいる社会の再認識は社会と自己の繋がりを見失ってしまった私たちに良い出会いを与えてくれる。

3 居場所における自己と他者

都市を眺める他者がいてそれを視認している他者がいて、その全体を見ている観察者（この場合は自分）がいる。互いに言葉や視線といったコミュニケーションはしていない。(図1)しかし他者の存在を感じ取ることができ、自分以外の他人同士が同じ都市空間に居ることを理解する環境において、確かに居る自分の存在を認識できる。その場においては、サードプレイスの条件として重要視された他者との会話の必要はない。曖昧な概念である社会を可視化できるのは都市の街並みだ。そこには高層のビルや整えられた公共施設だけではなく自分とは直接的な繋がりがほぼ無い他者という存在が不可欠だ。

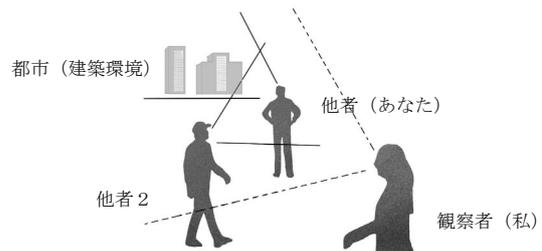


図1 都市における他者と自己の関係 (*2)

4 街路の可能性

バーナード・ルドルフスキー著『人間のための街路』(*3)では「街路の永久使用権は人間にある」と述べられている。以下の写真は街路が人間によって活用されている。



写真1 写真2 写真3 写真4 (*3)

本来あるべき街路とは歩行する人間とそこで発生する多様な複雑な機能を抱擁する空間であるべきだ。そして起こりうる諸機能を発生させたとき、その街路は都市に生きる人間にとって豊かなものになると考える。

5 対象敷地 下北沢駅前広場

東京都世田谷区にある下北沢は個々の小規模商店と複合商業施設がにぎわいの風景を作り出し、広域からの集客も多い拠点となっている。下北沢駅周辺は2004年の小田急線線路地下化を皮切りに大規模な開発が行われた。老朽化や開かずの踏切問題があった駅前食品市場と地上駅舎の場所は駅前広場になっている。新たにバスロータリーの工事が進められており、設計にもバスロータリーの機能を持たせる。



図2 下北沢駅周辺の移り変わり

この場所を活用する対象者は以下の3つである。

- ・地域住民
- ・活動の場所を求めている地域住民
- ・下北沢の文化を味わいにきた人

下北沢を拠点に活動をする人々に社会と繋がれる居場所の提供をするとともに、下北沢の文化の発展を期待する。そして滞在した人が都市の中の他者を認識し自己を見つめ直す過程で、自分の居場所となりうる場所を見つけ出すことを目指す。

6 設計提案

下北沢に必要な居場所として他者と交流する場「イドバタ」と、他者の中で自己を再認識する場「イドコロ」の2つを提案する。

6-1 イドバタとイドコロ

イドバタではチェーン店ではない地元の店や劇団、お笑いなどの下北沢の文化を担った人々に、地域へ発信する場所を提供する。現在も下北沢駅前広場では個人の露店や古着屋が店出するマーケットやカレーフェスなどのイベントが開催され、地域内外から人が集まる。イドバタに参加した人々は下北沢ならではの文化に触れ、そこで出会う人との交流によって居場所を得る。

そしてイドコロは交流を目的としない。イドバタの近くに居ながらも直接参加することはなく、姿や音で人々

の賑わいを認識する。会話というコミュニケーション方法に限らず、他者を視認・意識することも1つのコミュニケーションと捉える。イドコロに居ることで都市と他者を感じ取り、自ら選んだその場所が自己を見つめ直せる居場所となる。

	都市の居場所	
	イドバタ	イドコロ
空間スケール	大きい	小さい
訪れた人のふるまいの形式	集団	個人
他者との関係	直接（対話、交流）	非直接（視認）
提供する価値	人との交流による居場所の獲得	他者の認識による自己の再認識

表1 イドバタとイドコロの定義

6-2 壁柱

建物は壁式RC構造を採用し、壁柱で空間を構成する。壁柱の配置は自由度が高く、その壁柱をイドバタとイドコロの空間分けに用いる。壁柱を配置する角度や高さ、幅、壁同士の交差などの操作によって多様な空間を作ることが出来るため、イドバタの大空間とイドコロの小空間のどちらの設計にも適している。

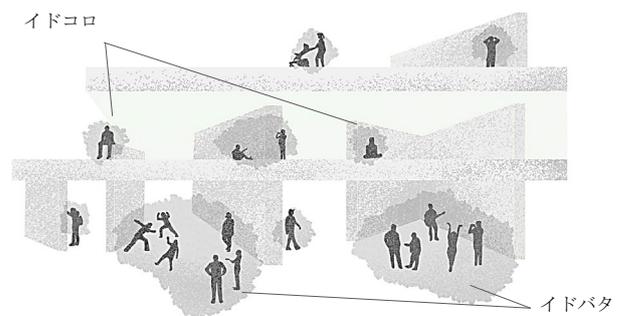


図3 イドバタとイドコロのイメージ

配置のテンプレートには開発前の駅前食品市場と地上駅舎、電車のスケールを用いる。地上の壁柱はかつての風景を思い起こさせるとともに、下北沢に新たにパブリックなサードプレイスを提示する。

* 主要参考文献

- 1) レイ・オルデンバーグ著 忠平美幸訳『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い空間」』みすず書房（1982）
- 2) 鈴木毅著『建築計画読本』大阪大学出版会（2004）
- 3) バーナード・ルドルフスキー著 平良敬一、岡野一宇訳『人間のための街路』鹿島出版会（1973）